学位論文要旨

学位論文題目　　遠藤周作の文学世界――生への問いかけ

申請者氏名　　霍　斐

本研究は遠藤周作の文学世界から、遠藤周作という作家の特質を明らかにしようとする試みである。具体的に、遠藤周作の前期（1953～1960 年）代表作『白い人』（1955 年）『海と毒薬』（1958 年）、後期（1961～1996 年）の重要作品、『わたしが・棄てた・女』（1963 年）『沈黙』（1966 年）『深い河』（1993 年）を研究対象として、遠藤文学における人間の深層心理を深く探求し、より根源的なところから論じてゆきたい。具体的には、各作品論の中で、次のように論じたのである。

第一章では、遠藤周作のデビュー作『白い人』（1955年）を研究対象とする。先行研究では、善悪二元論の枠内で小説を論じるのが一般的である。確かに、「私」はカトリックの教義に従うか背反するかという善悪の二元対立の下で悪を選択したのだが、作品の最後で、「私」はその二元論を突き抜け、善悪対立を超えた信仰の世界に到達したというのが、論者の見解である。そしてまた、論者は、ここで「私」が主体的能動的な独自な信仰に到達したことが、遠藤周作の作家的営為の出発点であり、そののちの遠藤文学はその能動的な生き方をどう受け止め、いかに求め続けるかを追求するところに展開されると考える。以上の見方は、本研究における遠藤文学理解の基本的枠組みであり、研究全体の見取り図でもある。

第二章では、遠藤周作の前期代表作『海と毒薬』（1958年）を研究対象とする。従来の研究では、ほとんどの論は、日本人の「罪意識」や神の問題に集中していて、組織の問題を正面から論じたものは極めて少ない。それに対し、本論は、組織の問題を真正面から取り扱い、組織と人間の関係を通じて作品を洗い直した。それは、人間の生の営みは組織（人間関係）と不可分である以上、人間の「罪」は組織と切り離せず、むしろ組織の問題を通して「罪」の問題はより普遍的な地平で捉えられるからである。本論では、組織の問題を通して罪の発生の根源を探ることにより、単に戦争という時代の問題や日本人の問題に止まらず、遠藤周作文学における罪と宗教の問題に新たな光を当て得たと考えている。

第三章では、遠藤周作の『わたしが・棄てた・女』（1963年）を研究対象とする。先行研究において、多くの論者は森田ミツの行為における倫理的な正しさを合理的に説明しようとした。本論は、ミツの行動における倫理性は、いかに合理的な思考で分析してみても、それはあくまでも事後的な解釈であること

を示し、彼女の行動は、倫理的に生きるための指針や規則を示すものではないが、そのような彼女のありようこそ〈真に倫理的に生きる者の姿〉であることを解き明かした。また、作中の吉岡努が書かれた手記から、彼はミツとの過去や山形の手紙に書かれたミツのことについて十年以上反芻することによって、人間における根源的な《責任》に気付いたことを明らかにした。

第四章では、遠藤周作の『沈黙』（1966年）を研究対象とする。従来の研究では、ロドリゴの信仰における「父の宗教」から「母の宗教」への変容を中心に論じられるものが多い。本論は、それらの研究成果を踏まえ、小説における異文化の衝突を出発点として、ロドリゴはいかに受動的に教義を守る宗教観から脱出し、能動的な姿勢で神を追及する宗教観に変化したかを追跡し、分析した。そして、「弱者」であるキチジローの生き方をクローズアップすることによって、「弱者」の生き方に潜む能動的な姿勢を発見して、その意義を指摘した。それはまた、真の信仰のありようを追求し続ける遠藤文学の展開過程における、『沈黙』の位置と意義を明らかにすることでもあったと考える。

第五章では、遠藤周作の集大成的作品である『深い河』を研究対象とする。先行研究は『深い河』に含まれる様々な主題を一つに収斂する研究が多い。しかし、筆者は『深い河』は遠藤従来の作品と違い、人間が生きる上での個々の問題を追求するのではなく、人間の生の様相そのものを包括的に開示する作品だと考える。本論は『深い河』は多様な人間の生き方を描いて、人間の主観的認識を超えたレベルにおける人間の生の実相を示す作品だと論じた。また、今まで研究してきた遠藤文学の諸作品と『深い河』の内在的関連を素描し、これまでの遠藤文学が追求してきた問題系のすべてがこの作品に現れていることを指摘し、このような意味において「集大成」たり得ている作品だと示した。

以上で、本研究は遠藤周作の「カトリック作家」という肩書きや、彼の言説からまず離れて、遠藤の文学作品そのものに注目し、分析、考察しようとしてきた。それにより、各々の文学世界において人間が生きる実態、倫理的に生きるモデル、倫理的な生を追求する人間の姿等を見ることができた。人間はいかに生きるべきかという問題に対する遠藤の関心は、彼の基督教教徒としてのまなざしに他ならないが、それは決して彼がキリスト教の教義から出発して創作を展開したということではない。むしろ、遠藤文学は既存の教義を反する立場から出発し、文学創作を通して真の基督教教徒としていかに生きるべきかを追及してきた。その姿勢は、遠藤周作が本当の「カトリック作家」だと言うことを示す最も有力な証明であるといえる。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 114号	氏　名	霍　　斐
論文題目	遠藤周作の文学世界――生への問いかけ		

（論文審査概要）

本学位論文は、遠藤周作の主要作品を分析して、善悪を超えた人間の生の実態、倫理と罪の問題等を論じ、遠藤文学の特質を明らかにしようとするものである。遠藤周作がカトリック作家であることから、従来の遠藤文学研究がキリスト教の教義を前提して展開されたのに対し、その点を括弧に入れて研究を進めた点に独自性があるといえる。

本論文は、序章、結章のほか、本論は５つの章より構成されており、その概要は次のとおりである。

第一章は『白い人』を論じる。先行研究ではキリスト教の教義に基づく善悪二元論で論じるのが一般的だが、主人公「私」はその二元論を突き抜け、善悪対立を超えた能動的生き方に到達したと論じ、ここに遠藤文学の出発点を見定めようとする。

第二章『海と毒薬』論では、従来のように日本人の「罪意識」や神の問題から論じるのでなく、人間の生の営みと罪の発生を「組織と人間」の関係から捉えようと試みる。

第三章は『わたしが・棄てた・女』を扱う。先行研究では主人公森田ミツの倫理的な正しさを様々に説明するが、本論は、彼女の倫理性は一切の合理的解釈を許さず、どんな指針や規範、教義をも超えていることを指摘して、ここに倫理の根源があるとする。

第四章では『沈黙』を論じる。先行研究ではロドリゴにおける「父の宗教」から「母の宗教」への変容を中心に論じられるが、本論は、受動的に教義を守る宗教観から能動的な姿勢で神を求める宗教観への変化の中に作品の意義を見て取る。

第五章『深い河』論では、先行研究のようにある一つの主題に収斂させるのでなく、本作品をさまざまな問題を含む多様な人間の生き方を描いて、人間の主観的認識を超えたレベルにおける人間の生の実相を示す作品だと論じた。また遠藤文学諸作品と『深い河』の内在的関連を素描し、遠藤文学の諸問題がこの作品に集中的に現れていることを指摘して、本作は遠藤文学の「集大成」たり得ているとした。

本研究では、遠藤周作の作品の分析、考察を通して、生を通して倫理的な生を追求する人間の姿に関心を向けてきた。その中で、キリスト教の教義から作品の意義を量るのではなく、むしろ逆に一貫して創作プロセスの中でキリストの教義が検討対象とされる様に光を当てようとした。つまり、文学創作を通して真の基督教教徒としての生き方が追及され、その中で文学の機能が発揮されるという点に、遠藤文学の独自な価値を発見しようとした。このような角度から「カトリック作家」としての遠藤周作の仕事の意味を追求したところに、本研究の意義があるといえる。

以上から、以下の点を評価できる。

1．創造性
従来の遠藤周作研究の動向を十分に理解したうえで、新しい論点を新しい視覚から提起しようとしており，その意味についても十分自覚的に表現できていて、遠藤周作研究における貢献は明確であるといえる。

2．論理性
作品分析においては、適正かつ妥当な論証手続きがとられており、研究論文を支える論理も安定し、優れている。

3．厳格性
遠藤文学における先行研究は十分に探索され、各論考の意義把握、価値付けも的確である。さらに資料を論に引用する方法も厳格であり、研究上の基本的態度が身についていることがうかがわれる。

4．発展性
研究上の論理の構築において手堅い手法が用いられているというだけでなく、論理を支える人間観が広く、奥行きをもったものであることから、将来の研究が大きく豊かな発展する可能性があり、研究の今後の展開が期待される。

以上により、審査委員会における審査委員の合議によって全体の評価は「達成できている」との結論に至った。従って、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果
合・否

審査委員　（氏 名）村上林造

（氏 名）吉村誠

（氏 名）有元光彦

（氏 名）

（氏 名）